

宮崎発夢未来～感動の共感を世界中に

みやざき中央新聞

〒880-0911 宮崎県宮崎市田吉6207-3 info@miya-chu.jp Tel(0985)53-2600 Fax(0985)53-5800

毎週月曜日(第5月曜日は除く)、月4回発行/1か月1,080円(税・送料込)

11月2日(月)

2015年(平成27年)

2623号

2面記事

高垣 忠一郎さん……心のドアを開くために～No. 2
 栗城 史多さん……見えない山に登るすべての人たちへ～No. 4
 南 徹さん……対話が創った日本の文化～No. 3(終)
 ルダシングワ 真美さん……第二の足で歩き出す～No. 4
 野中 千尋……取材ノート「これでいいの」

「なんでがんなるまでほったつといたんだ!」。平成18年5月1日、工藤房美さんは熊本市市民病院の医師から怒鳴られた。末期のがんだった。48歳。家には心を病んでいる夫と高校3年生を頭に3人の息子がいた。

検査に2週間かかり、明日はいよいよ手術という日、主治医が言った。「がんが広がり過ぎていて手術ができません」。あまりのショックで涙も出なかった。帰宅して、3人の息子たちに遺書を書いた。

長男には「あなたを誇りに思う。これからも堂々と自分の好きなことをやりなさい。病気になるってごめんね。大好きだよ」。

高2の次男には「楽しいことを見つけて、ことが得意だから好きなことを見つけて楽しんで生きて……」。

小6の三男には「大変なときは我慢しないで周りの大人の人に助けをもらいなさい。お兄ちゃんたちと3人で協力したらなんでもできるよ……」。

「愛している」「あなたたちの母親になれてよかった」「あなたたちを最後まで愛し抜く」ということを精一杯伝えた。

扁平上皮がんという、内部が空洞になっている臓器の粘膜に発生するがんだった。主治医から「ラルス」と呼ばれる治療法を告げられた。「痛くて苦しい治療です。これを3回します」と。

治療の日、看護師から、「痛み止めも麻酔も使いません。タオルを口に入れます。耐えるしかありません」と説明を受けた。その後、1時間かけて器具が取り付けられた。

眠っている遺伝子をオンにしてみよう



魂の編集長 水谷 謹人
 もりひと

体が固定され1ミリも動けなくなつたところで、口にタオルが入れられた。それは、痛いとか苦しいという次元のものではなかった。1時間、手が動かせないので溢れる涙も拭えない。口が塞がれていて悲鳴も上げられない。「治療ではなく拷問だ」と思った。

その夜「なんでがんになったんだろ」と自分を責めた。がんを告知されたときは出なかった涙が一晩中枕を濡らした。

2回目の治療の前日、三男の小学校の先生から一冊の本が届けられた。筑波大学で長年遺伝子を研究してこられた村上和雄先生の『生命の暗号』という本だった。最初はずつろな目でページを開いていた工藤さんだったが、次第にその目が大きく開いていった。胸の鼓動が高鳴った。読み終えたのは夜中の2時だった。

「人間には約60兆個の細胞があり、その一つひとつに遺伝子があつて、一つの遺伝子には30億もの情報書き込まれていて、ところが人間の遺伝子のうち実際に働いているのは全体のわずか5%しかない」というようなことが書かれていた。

「眠っている95%の遺伝子を少しでもオンにすることができれば元気になるのではないか」、そう思ったら、ワクワクしてきた。大声で「ばんざーい」と何度も叫んだ。工藤さんは決心した。「私の命はもう長くないかもしれないけど、今まで私を支えてくれた一つひとつの細胞と遺伝子にありがとうを言つてから死のう」と。

まず目や耳、手足、心臓、胃など、健康なところに「今までありがとう」とお礼を言った。抜けていく10万本の髪の毛一本一本にも「ありがとう」を言った。闘病生活は「ありがとう」を言う生活に変わっていった。

さらに患部のがん細胞にもお礼を言いたくなった。「正常な細胞だったのに私の思考の癖や歪んだ生活を教えてくれるためにがん細胞になってしまつてごめんなさい。そして、ありがとう」。

詳細は、今月末に発刊される工藤房美著『遺伝子スイッチ・オンの奇跡』をお読みください。

工藤さんはその後どうなったか? がんの告知から10か月後、子宮と肺と肝臓にあつたがんはきれいに消えてしまった。今工藤さんは熊本市内で「ロータス」というカレー専門店を経営している。

著書の中で工藤さんは、良い遺伝子をオンにする「コツ」をまとめている。①どんなときも明るく前向きに考える②思い切つて今までの環境を変えてみる③人との出会い、機会との遭遇を大切に④感動する。笑う。ワクワクする⑤感謝する⑥世のため、人のためを考えて生きる。